

マレーシアにおける港市の都市構成に関する研究

ーペナン・ジョージタウンを事例としてー

武末 佐恵加

【修士論文概要書】

1. 研究の目的と視点



本研究は、インド洋海域世界における東南アジアの港市として形成され、発展したマレーシアのペナンを対象とし、都市構成や建築空間の特質を明らかにすることを目的とする。マレーシアのペナンは 18 世紀後半にイギリスの入植により開発され、直轄植民地としてイギリス領にもなった歴史を持つ。イギリスの支配を受けながら、華人やインド人を中心に数多くの移民が定着し、都市空間が形成されて

きた。このような歴史的背景を持つ故に、マレーシアにおける 13 州で唯一、マレー系人口よりも華人の人口比率が高い州であり、宗教や生活文化が異なる民族(以下、コミュニティ)が共存するなど、たくさんの特色を持つ港市である。以上の背景を持つペナンを対象地として研究することで、ペナンの都市構成や、各コミュニティがどのように都市空間へ影響を及ぼしているのか、コミュニティや業種を視点として明らかにしたい。

2. 研究対象と研究方法

2013 年 2 月(山根)、8 月(山根、武末、深水、Mahammad Naeem)、2014 年 8 月(山根、武末)に調査を実施した。Lebuh Light, Pengkalan Weld, Lebuh Chulia, Jalan Masjid Kapitan Keling で囲まれた地区について、建築用途、階数、構造、建物使用者のコミュニティに関する悉皆調査を行い、ジョージタウンのインナーシティを形成している Jalan Penang と Lebuh Leith 以東かつ Jalan Dr Lim Chwee Leong 以北の地区について、宗教施設およびコミュニティ施設の分布および商店業種と経営者コミュニティに関する悉皆調査を行った。

これらの調査に基づき、コミュニティと施設分布や商店業種などの対応を分析することで、コミュニティ分布、施設分布などを明らかにし、それらの民族別・宗教別・出身別のコミュニティの集住・混住形態や住み分けなどの特質を明らかにする。

3. ジョージタウンの都市形成

ジョージタウンの都市形成と景観は、イギリスの植民地時代である 1900 年頃までに完成し、現在まで続いている。1850 年～1900 年にかけて急激に華人の移民が増え、イギリ

スも本格的に開発を始めたため、この 50 年程の間に、都市が急速に成長し現在の形までほぼ完成した。コミュニティの分布も、この時期に大きく動いた。道路の整備が進み、移民が急増し、さらに市街地の衛生面や大火災などから環境が悪化したことにより、一番古い街区に居住する西欧人と入植初期から居住する華人の富裕層が郊外に移り住んだためである。その後、新たな華人移民による市街地の拡大が落ち着いた 1900 年頃までに、現在の大まかなコミュニティ分布の形が完成したと考えられる。

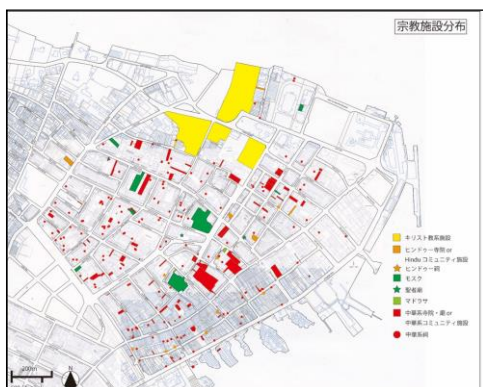
2013 年に最も古く形成された地区を対象に行った調査では、全 647 戸の内、約 73% を占める 470 戸がレンガ造のショップハウスであった。ショップハウスとは、店舗併設型住居のことである。レンガ造のショップハウスが、「住宅・店舗・倉庫を兼ねた複合住宅」としてペナンの記録に登場したのは、ペナンを開いたフランシス・ライトがペナンにある様々なレンガ造の建物の価額報告を記した”Brick buildings of prince of wales island-1793”の記録である。当時の住居は茅葺屋根(アタプルーフ)の住居が多かったようだが、1850 年～1900 年頃の移民の急増時に、イギリス当局による防火対策としてショップハウスが数多く建設され、茅葺屋根から建て替えられた。当時導入されたショップハウスの構造は既にレンガ造であったと考えられる。従って、現在のレンガ造のショップハウスが立ち並ぶ景観は、この当時にほぼ原型が出来たと言える。この町並みが、現在まで残存しているのは、1947 年に施行された”Rent Restriction Act”（家賃統制令）の影響である。この法令は、都市内人口をコントロールするために家賃を戦前の低水準のまま凍結するものである。この影響で、ショップハウスの家主は不動産収入が見込めず、開発はおろか、修繕さえできないショップハウスもあった。1900 年頃までに現在の都市と景観の原型が完成し、家賃統制令の影響により 1999 年の 12 月に法令が完全撤廃されるまで、都市形成と景観が保存された。2013 年の調査では RC 造のショップハウスや、建物の新築、大規模な開発も見受けられた。しかし世界遺産に指定され、ペナンの観光資源でもあるショップハウスの町並みは現在も保たれている。

4. コミュニティ分布および宗教施設・コミュニティ施設の分布



上記のように 1900 年頃に現在のコミュニティ分布の基礎が形成されたと考えられるが、最も古い時期の街区に居住していた西欧人や華人富裕層が郊外に出たことで、Lebuh Chulia 沿いに分布していた、主としてヒンドゥー教徒のインド人コミュニティが、北東に居住範囲を拡大したと考えられる。一方、Kapitan Keling Mosque 周辺に分布をしていた musulman のインド人は、移民の増加に伴

い、19~20 世紀に新たに増えた華人の移民と混住しながらも、主に Lebuh Chulia 沿いに西へ居住地区を拡大したと考えられる。ヒンドゥー教徒は、ヒンドゥーコミュニティで固まって居住しているが、インド人 musulman とマレー人は、華人と混住した分布を確認できた。



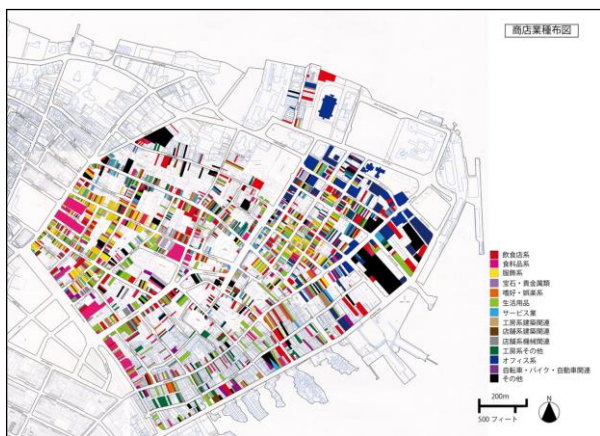
コミュニティと関連の深い、宗教施設、コミュニティ施設の分布調査の結果、中華系寺院および華人の同郷会館や祖廟が市街地全域に広く分布し、同じく華人による、土地神を祀る多数の小祠堂が分布することが確認された。

宗教施設に関しては、St. George's Church（1818 建設のキリスト教会）、観音寺（1801 建設の仏教寺院）、Mariamman Temple（1833 建設のヒンドゥー教寺院）、Masjid Kapitan Kling（1801 建設のインド人ムスリムのためのモスク）、Masjid Malayu Lebu Aché（1808 建設のマレー系住民のためのモスク）といった各コミュニティの中心的な宗教施設が、1800 年以前の最初期の都市形成時にフランシス・ライトによって計画されたオリジナルグリッド地区の外周部に、それぞれのコミュニティに関する名を冠した街路から正面に見えるように位置しており、計画的に配置されたことがうかがえる。

インド系の宗教・コミュニティ施設に関しては、北インドのグジャラート地方と南インドのタミル・ナードゥ地方に由来するものが多いことが明らかになった。またコミュニティ分布については、南インド出自のヒンドゥー教徒が集中して分布するリトルインディアに、近年バングラディシュ、ネパールからの出稼ぎ労働者も定着してきており、コミュニティの構成が変化してきていることも明らかになった。

土地神などを祀った小祠堂に着目すると、ほとんどは華人のものであったが、ヒンドゥー教の神を祀ったものも見られたほか、ダトゥと呼ばれるマレー人の土着信仰と華人の土地神とが混淆したものや、さらにヒンドゥー教やイスラム教と華人の土地神信仰とが混淆した例も少数ではあるが確認することができた。宗教や生活文化が異なるコミュニティ間の信仰形態の混淆事例は大変興味深い。

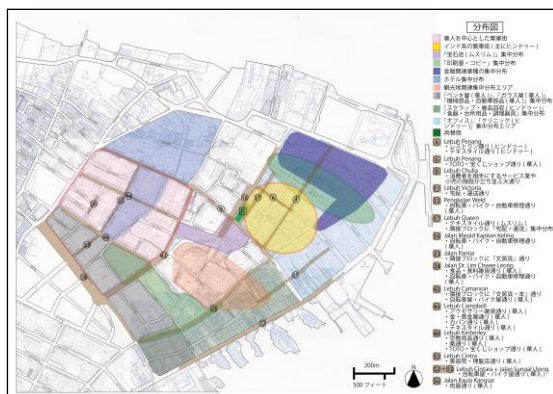
5. 商店業種分布とコミュニティの構成



商店業種分布とコミュニティ分布の調査結果の分析から、コミュニティごとに関連のある業種に特色があることが明らかになった。インド人のヒンドゥー教徒コミュニティは、「服飾関連業種」、「スクラップ・廃品回収」、「アクセサリー雑貨」、「宗教用品販売」等との関連が強い。インド人ムスリムコミュニティは、「両替商」と「宝石商」等との結びつきが強く、それらの店舗は Masiid

Kapitan Kling 周辺に集中して分布するほか、「両替商」については、市街地東西の幹線街路である Lebu Chulia 沿いにも分布が確認できる。華人について見ると、ジョージタ

ウンでの人口比率が高いこともあり、ほとんどの業種に従事していることが確認できたが、華人コミュニティと特に関連が強い業種に「建築・機械関連業種」が挙げられる。「建築・機械関連業種」は、他コミュニティとの関連が非常に薄く、実質的に華人の独占状態となっている。ジョージタウンの建設工事やマレーシア本土での錫鉱山の開発に華人が深く関わっていたという歴史的背景がこのような状況をつくりだしたのではないかと考えられる。このように、業種におけるコミュニティごとの棲み分けの実態が確認できた。



また業種とコミュニティの分布に着目すると、同一コミュニティや同一の業種が集中する街路が多数あることも明らかになった。例えば、Lebuh Campbell 沿いに華人コミュニティの「アクセサリー雑貨」、「金・貴金属」、「カバン」、「テキスタイル」の各業種が集中分布をしていたり、Lebuh Penang 沿いにヒンドゥーの「レストラン」、「テキスタイル」の各業種が集中分布をしていたりすることが見られた。

以上のようなコミュニティと業種の特定のエリアへの集中分布の分析により、ジョージタウン市街地における現在の業種による空間構成が明らかになった。例えば、元の西欧人居住地は、業務地区や金融関連業種が集まる地区になり、オリジナルグリッド内にオフィスが集中分布をしている。その他にも、ホテルの集中分布地区や工房が集中する地区などが確認できた。また調査地区は世界遺産に選定され、地区全体が観光地ではあるが、「ギフト・土産・記念品」の業種や「ミュージアム・ギャラリー」の施設が集中していることから、全体が観光地である調査地区内でも、観光地の中心エリアが明らかになった。

6. 結論

本研究により明らかになったジョージタウン市街地の空間的特質をまとめると以下のようになる。

- (1) 1850 年～1900 年頃の移民の急増により、市街地が拡張した時期に、コミュニティ分布やレンガ造のショップハウスの町並み、道路や市街地の原型が大まかに完成し、1915 年制定の家賃統制令の影響により、現在まで当時の主要な都市形態や景観が残された。
- (2) Jalan Masjid Kapitan Kling 沿いに、1850 年以前の初期の古い宗教施設が配置され、計画性が伺える。さらに、インド系の宗教施設・コミュニティ施設では、南インドのタミル・ナードゥ地方と、北インドのグジャラート地方と関連を確認できた。
- (3) 多数分布する小祠堂は、華人の土地神を祀るものが中心であるが、一部イスラム教やヒンドゥー教のものも見られ、さらに異なる宗教の神格が混淆する事例も確認できた。
- (4) コミュニティごとに、業種の棲み分けがあることが明らかになった。さらにコミュニティや業種が特定の地区に集中して分布することも確認でき、コミュニティごとの業種の棲み分けが都市空間構成とも密接に関連している実態が明らかにできた。